

天治本新撰字鏡と法隆寺一切経の書誌学的研究

石 井 万 紀 子

一、天治本『新撰字鏡』と『法隆寺一切経』との関係について

現存最古の漢和字書『新撰字鏡』の今日までの研究成果をふりかえってみると、まず、所収の和訓の年代的な問題を取り上げるといふ語彙論・語彙史の立場からの研究が、早くに行なわれた。また、その和訓を表記している万葉仮名遣の問題を、音韻論・用字法の立場から研究するという傾向が、近年、特に目立っている。さらに、『新撰字鏡』の成立に関わる問題を解明すべく、『玄応一切経音義』『玉篇』『切韻』や、その他私記類を取り上げ、比較対校した出典論の立場からの研究も着実に成果を上げている。

ところが、これらの研究の基礎となる十二巻本『新撰字鏡』の唯

一 の古写本である天治本『新撰字鏡』（以下、天治本と略す）そのものの本文校訂や書誌学的研究は、これまでほとんど行なわれることがなかった。ただ、その中で、特に天治本の書写者の問題に絞って論じた田中論文（二）、天治本『新撰字鏡』について 第二節で詳述）の存在は、非常に大きいと言える。

この、天治本の書写者の問題を解明することは、右に述べたように、天治本の書誌学的研究が、等閑視されてきたという点を考慮すれば、今後、天治本の書写成立過程を究明し、また、その本文校訂の問題を追究していく上で、重要な意味を持つのではないだろうか。

さて、本稿において、天治本の書写者をいかに解明していくかについて、その概略を説明しておく。まず、天治本巻第一の奥書を左に掲げる。

新撰字鏡卷第一

天治元年^{甲辰}五月下旬書寫之畢

法隆寺一切經書寫之次為字決諸人各一卷書寫之中

此卷是五師靜母之公以暇業所寫了



右に掲げた奥書のうち、経印・天治本の奥書より見た『法隆寺一切経』との関係・書写者名の三点に着目することを出発点とし、天治本と『法隆寺一切経』両者の関係について以下の様に考察してみることにする。

《一・経印》

天治本が縮小印刷されているために、『法隆寺一切経』も、約二分の一に縮小したものを掲げた。(図①参照)

《二・天治本の奥書より見た法隆寺一切経との関係》

《天治本》

○卷第一

天治元年甲辰五月下旬書寫之畢

法隆寺一切経書寫之次為字決諸人各一卷書寫之中

此卷是五師静因之分以藤筆所寫耳

○卷第二

天治元年甲辰五月二日寅書寫畢法隆寺一切

経音義料也為自他法界平等利益勸進僧林幸

○卷第五

天治元年四月廿九、為令法久住法隆寺一切経藏料書寫執筆僧
覺嚴之

○卷第七

天治元甲辰五月十九日交了法隆寺一切経勸進沙門
同寺僧五師大法師琳幸結縁書寫寺僧静尋
廻向无上并

○卷第八

天治元年甲辰四月廿六日書寫畢為弘法利生結縁助成敬白執筆僧
隆運

法隆寺之一切経之料滿寺學文輩各一卷書之

○卷第九

天治元年甲辰四月廿七日甲戌已剋書寫已畢

法隆學文寺為一切経之音義當寺諸僧

各一卷書之今此卷同寺僧覺印書之

○卷第十二

天治元年甲辰五月十日書寫了法隆寺一切経論料也

《三・書写者名》

《天治本》

○ 卷第一：静因

○ 卷第二：林幸



(卷第五)



(篇立)



(卷第六)



(卷第一)



(卷第八)



(卷第二)



(卷第九)



(卷第四)

- 卷第五：覚厳
 - 卷第七：静尋
 - 卷第八：隆暹
 - 卷第九：覚印
- 図① △天治本▽

- 卷第十：応順
- △法隆寺一切経▽
 ○ あり：胤願・永兼・永珍・延清・円智・応舜・応順

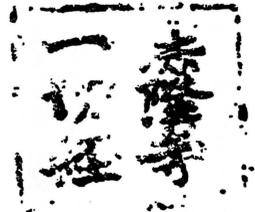


(卷第十)



△法隆寺一切經▽

A



(卷第十二)



B



C



D

- A...大寶積經 卷第九十二 永久三年 寛胤
- B...根本説一切有部毘奈耶雜事 卷第二十八 保安四年 寛長
- C...摩訶般若波羅蜜溫想拘舍羅道行經勸助品第四 卷第三 天治元年 良祐
- D...瑜伽師地論 卷第三十 天治二年 行住

- 可行：快円・快与・覚允・覚印・覚胤・覚賀・覚嚴・覚春・
覚長・覚益（薬師寺）・覚俊（薬師寺）・観寂・久仁・
経真・経暹・経与・慶舜・慶深・見円・兼仁・兼忍・
兼与・嚴意・嚴雅・嚴賀・嚴海（飛仙道者）・嚴足（興
福寺）・嚴舜・行教・行住・行暹
- さ行：慈慶・実運・尺海・重賀・春珍・俊憲・勝賢・浄暹・
浄尊・静因・静快・静尋・尋因・尋応・尋海・尋覚・
尋玄・信耀・真与・仁勝・性意・性嚴・正円（三井
寺）・正春・清寂・清珍・清曜・暹快・暹尊・宗信・
尊珍
- た行：泰範・湛証・智印・智賢・智嚴・智仁・朝順・長覚・
長順・珍久（薬師寺）・定快・定観・定舜・道海・道
寂・徳嚴
- な行：念寂
- は行：範雅・範勝・範禪・弁海
- ま行：明行・明與
- や行：与清
- ら行：頼円・頼慶・頼憲・頼助・頼文・頼祐・隆暹・良円・
良勝・良能・良祐・林覚・林幸・林春・林勝・林智・
琳範

以上、天治本巻第一の奥書から着目すべき三点を取り上げて、天治本と『法隆寺一切経』両者の関係について概観してみたが、一

・経印』においては、経印内の文字の比較を行なってみると、両資料とも、すべての文字が同一である（法）：傍の下部へた（寺）：六画目の位置へ寺、および、右上がりである字体の傾き・（一）：筆の入れ方、および、筆の止め方へ（隆・切・経）：偏、および、傍の字体）ことがわかる。また、二・天治本の奥書より見た法隆寺一切経との関係においては、「法隆寺一切経書寫之次」（卷第一）、「法隆寺一切経蔵料書寫」（卷第五）といった奥書からして、『法隆寺一切経』の書写作業の中で、天治本も書写されたことが明らかである。さらに、三・書写者名において、天治本を書写した人物が、『法隆寺一切経』の書写者一覧中に全員含まれているように、彼らが『法隆寺一切経』の書写作業に深く関わっている（法隆寺一切経の線部分参照）ことが明らかとなった。すなわち、以上の三点から、天治本と『法隆寺一切経』との間には、密接な関係があることがわかる。よって、本稿において、天治本の書写者不明箇所を追究していくための手がかりとして、『法隆寺一切経』を天治本と対校させる理由は、まさに、ここにあると言える。

しかし、単に、天治本を『法隆寺一切経』と対校させるといつても、『法隆寺一切経』は、長和年間から嘉慶年間までの約三百年間という長い年月をかけて書写され、約七千一百巻という莫大な巻数からなるものであるから、それらすべてについて対校しても意味がないのは当然であろう。そこで、本稿で扱う『法隆寺一切経』については、その書写年代を、天治本が書写されたと言われる天治

年間に絞って、天治本と比較対校し、天治本の書写者を解明していくことにする。なお、本稿が、天治本と対校させる『法隆寺一切経』は、すべて、大谷大学図書館所蔵のもの(以下、谷大本と略す)を用いた。この谷大本の詳細については、「三、『法隆寺一切経』について」の第二・三節で述べることにする。

二、天治本『新撰字鏡』について

第一節 総記

撰者は、南都法相宗系の学僧であったとされている昌住。最初、寛平四年(八九二)に、『玄応一切経音義』を主体として三巻本を編集したが、後の昌泰年間(八九八〜九〇二)に、『玉篇』『切韻』および私記類を吸収して、現存する十二巻本へと増補改定され、都合二度の編纂が行なわれた。現存するものは、完本と抄本の二種で、前者は、天治元年(一一二四)五月に、法隆寺にて書写された十二巻本系統のもので、後者は、室町時代頃に、完本系から和訓のある文字だけを抄録したものであるが、これには、享和三年(一八〇三)正月刊本(『享和本』)と、『群書類従』所収本(『群書類従本』)とがある。以下、本稿が問題とする前者、完本系天治本の体裁について述べていくことにする。

標出字数は約二万九百三十余字で、そのうち約一万六千三百余字につき、偏・旁で分類され、各字に反切・漢字による意義注がつけられている。また、なかに、真仮名で示す和音が約七十例、和訓が

約三千七百条補入されており、この和音・和訓の存在が、『新撰字鏡』が現存最古の大規模な漢和字書と言われる所以であるとされている。この他に、特別な異体字(〈例〉群一羣一羣)や、国字(和製漢字)(〈例〉神、枸、剗)が収められている。『新撰字鏡』が日本語資料として重要な意味をもつ和訓に関しては、『文選』『遊仙窟』の傍訓や、『日本霊異記』の訓釈を取り入れたかと思われる箇所が見られることがわかる。一方、この和訓を付したのは、例えば、巻第十の三丁裏にある「悵」という文字に着目してみると、『篆隸万象名義』には、「於汲反歎息・不安」とあるが、『新撰字鏡』では、両訓注ともとっておらず、特に、『篆隸万象名義』の「歎息」と、『新撰字鏡』の「伊太弥奈介久」とを照合してみると、『新撰字鏡』は、『玉篇』にあった「歎息」を、和訓「伊太弥奈介久」によって代用させたということが推測され、今、わずか一例だが、もし、全和訓にこのようなことが適用できれば、撰者、昌住自身であるという可能性も高いと考えられる。さらに、右記の点を補強する根拠として、それらの和訓表記に用いられた真仮名(万葉仮名)は、上代特殊仮名遣が大部分失われているものの、「コ」の仮名に限って甲乙二類の使い分けがなされている。こういった現象が生じたのは、平安初期頃までである点と、『新撰字鏡』の成立した寛平や昌泰という年代を考え合わせても、和訓を付したのは、撰者、昌住自身であるということが首肯されよう。

『新撰字鏡』全体の体裁は、百六十部の部首分類体の字形引字書であるが、大局的には、天(日・月・肉・雨・風部など)・人事

(父・親族・身・頁・面部など)・自然動植物(山・谷・玉・田部など)の三大区分の順序で成り立っている。こうした意味分類の排列は、『新撰字鏡』の特色の一つで、後の、『倭名類聚抄』『世尊寺本字鏡』『字鏡集』に大きな影響を与えている。

こうして『新撰字鏡』は、我が国の字書史において、重要な位置を占めるものとなったのだが、鎌倉時代の弘安末年頃(一二八七年頃)に成ったとされる『本朝書籍目録』には、当字書の名が見られず、また、本居宣長が、『玉かつま』に、

新撰字鏡は、かつて世にしられぬふみなりしに、めづらしく近きころ出て、古へ学びするともは、あまねく用ふるを、あつめたる人の、つたなかりけむほど、序の文のいと拙きにして、く、すべてしるせるやう、いともいとも心得ぬ書也。

と書いているように、成立後間もなく世に知られなくなったのかと考えられる。しかし、院政時代の僧心覚(一一七〇—一一八〇)の『鵝珠鈔』七巻には、当字書の引用が見られ、字書を日常よく使っている者には流布していたのではないかということもかいま見ることがができる。

第二節 田中論文の紹介

近年の『新撰字鏡』の研究の傾向に関して、『新撰字鏡』の内容そのものの研究、すなわち、所収の和訓を取り上げた語彙論的研究や、出典論的研究は、多く行なわれているが、本文校訂や書写者に関する書誌学的研究は、ほとんど行なわれていないということを、

先の(一)、天治本『新撰字鏡』と『法隆寺一切経』との関係について)の中で触れたが、本節では、数少ない書誌学的研究の分野において、大きな存在意義を持つと思われる田中論文を紹介しておくことにする。

この田中論文とは、「天治本『新撰字鏡』書写者の検討」という題名で、昭和五十八年度大阪樟蔭女子大学国文学科卒業論文として、田中千賀さんによって書かれ、後、国語学会中四国支部第二十九回大会で発表されたものであり、天治本全十二巻のうち、奥書のない巻(巻第三・六・十一)、および、奥書があっても名前が書かれていない巻(巻第四・十二)の、書写者が不明な五巻の書写者検討が行なわれている。

この田中論文では、まず、「也」、「第」といった各巻において頻出度の比較的高い文字を各巻毎に抽出し、比較することにより、書写者不明の各巻には複数の書写者の手が存在することを明確にしている。そして論中において、書写者が判明したいくつかの箇所を列挙すると、左記のようになる。

- ① 書写者のわかっている巻第五と、書写者の不明な巻第十一とを「也」、「第」、さらに、「反」などといった文字を手がかりに比較することにより、巻第十一内部に巻第五と同筆の箇所が存在する。その書写者は、巻第五の書写者、すなわち、覚蔵である。

- ② 巻第十一の四十二丁表(七一九)からはじまる経文、「不空罽索神呪心経序」の書写者は、巻第十一の三十六丁表(七〇

表①

12		11					6			4	3	巻 書 写 者 記 号	
		F	E	D	C	B	A						
	・三十一丁裏(七八六)⑦ ・三十三丁表(七八) 九(跋文及び追加部分)	・四丁裏(七三二)⑤⑧	・四丁表(七三二)⑤ ・一丁裏(七三二)④ ・一丁表(七三二)④ ・三十一丁裏(七八六)⑤	・三十一丁裏(七〇七)④ ・三十一丁表(七〇七)④ ・四十二丁裏(七二八)④ ・四十二丁表(七二八)④ ・四十三丁裏(七二二)④ ・四十三丁表(七二二)④ △不空羅索神呪心経序△	・三十三丁裏(六六二)①「竊」 「竊」	・十六丁裏(六六七)① ・十六丁表(六六七)① ・三十五丁裏(七〇六)① ・三十五丁表(七〇六)①	・二丁裏(六四〇)⑥ ・二丁表(六四〇)⑥ ・五丁裏(六四五)② ・五丁表(六四五)② ・八丁裏(六五二)③ ・八丁表(六五二)③ ・九丁裏(六五四)④ ・九丁表(六五四)④ △AとCの書写部分を除く△	・一丁裏(六三七)① ・一丁表(六三七)① ・四丁裏(六四三)② ・四丁表(六四三)② ・五丁裏(六四五)③ ・五丁表(六四五)③ ・八丁裏(六五二)④ ・八丁表(六五二)④ ・九丁裏(六五四)⑤ ・九丁表(六五四)⑤ △AとCの書写部分を除く△	・三十二丁裏(三八二)① ・三十二丁表(三八二)① ・三十三丁裏(三八二)② ・三十三丁表(三八二)②	・十四丁裏(三九五)⑧ ・十四丁表(三九五)⑧ ・十八丁裏(三九九)⑨ ・十八丁表(三九九)⑨ ・二十一丁裏(三三八)⑩ ・二十一丁表(三三八)⑩ ・二十二丁裏(三三八)⑪ ・二十二丁表(三三八)⑪ △「環」 △「謂」 △「之」 △「を」 △「除」 △「く」	(書写者二名以上か) (書写者単数複数判別不能)	丁数・表裏・(ページ数)・行数	
林幸							覚 嚴	林 幸				判 書 写 者 明 略 号	
	12b	12a	11e	11d	11c	11b	11a		6b	6a	4a	3a	

七)から四十一丁裏(七一八)までに見られるいくつかの種類
の文字と、この「不空羅索神呪心経序」内の文字の比較を行な
った結果、「不空羅索神呪心経序」の直前まで書写してきた人
物、つまり、巻第十一の三十六丁表(七〇七)から四十一丁裏
(七一八)までを担当した書写者E(表①参照)である。

③ 巻第十二の跋文の書写者は、巻第二の字形と類似する箇所が
多く見られることから、巻第二の書写者、林幸である。

また、これら以外に、巻第五・六・十一・十二に見られる追加部
分(各巻の最後に書き加えられているもの)のこと。但し、本文内の
上・下・左・右に書き加えられているものは含まない。に關して
も、文字を比較するという同じ方法で、書写者の検討が行なわれて
いる。

右に摘記してきた点を総合的にまとめると、天治本内部で書写者
がすでに判明している各巻と不明な各巻との相互の比較の結果は、
田中論文によると、上記の表①のようになる。

以上、田中論文の大筋を紹介したが、その田中論文の存在意義の
大きさは、すでに述べた通りである。しかし、問題点はいくつか存
在する。そのうちの最も大きいものとして、調査対象を天治本に限
定し、天治本の書写に關わった僧の筆跡を基準にしてしか比較しな
かったということが挙げられる。そのため、残された書写者不明箇
所が多すぎるのではないだろうか。

三、『法隆寺一切経』について

第一節 総記

一切経とは、経律論の三蔵を中心に名高い僧侶達の著書を収集した仏教典籍の総集をいう。梵語の原典は完全な形をとどめないが、パーリ語原典をはじめ、中国語、チベット語、蒙古語、満州語などの訳本が現存。最も完備し、大部なのは中国語訳で、歴朝にわたって翻訳され、唐代に五千四十八巻に定着したが、その後も増補が繰り返されて、結局、一万二千九百七十巻という大規模なものとなった。

この一切経は、我が国にも、すでに奈良時代には幾種類かのものもたらされ、さらに、転写が繰り返された。そのうち、本稿において扱う『法隆寺一切経』は、今日、法隆寺に伝存されている保安三年（一一二二）三月廿三日の『法隆寺林幸一切経書写勸進状』によれば、永久二年（一一一四）の頃、勝賢によって二千七百余巻の書写が終ったので、元永元年（一一一八）十月二日小田原上人教懐を囑請して、未完のまま一応供養を遂げたが、残る四千四百余巻は五箇年を経た今日猶いまだ手をつけてないので、今年保安三年三月より始め、都鄙に勸進し、一紙、一巻の奉加によって大願を遂げたといっている。ただ、そうした経緯で書写された經典の他に、長和元年（一〇二二）の書写になる『十地経論卷第十』が大谷大学に存することから、おそらくこの一切経書写の発願は、永久二年を百

二年ほど溯った長和元年以前とも考えられる。とすると、この書写は、第一期として、長和元年頃から行なわれはじめ、以後、応徳・承徳・康和の各年代にわたって少しずつ書写が進められていたようである。そして、第二期として、永久二年に、勝賢の勸進によって行なわれ、さらに第三期として、保安三年に、林幸の勸進によって行なわれたと言える。

ところで、右に述べた書写の経緯の中に掲げた經典の巻数を見ると、第二期に約二千七百巻、第三期に約四千四百巻の書写が行なわれたことになる。ということは、計約七千一百巻もの經典が、法隆寺に収められていたのであろう。しかし、今日、法隆寺に伝存している、いわゆる『法隆寺一切経』は、六百六十一巻にすぎない。また、私に調査したところでは、法隆寺以外に所蔵されているものが百六十八巻あった。よって、現存の『法隆寺一切経』は、計八百二十九巻と、当初存したであろうものの、わずかに割強にしか満たない。さらに、法隆寺に所蔵されているものは、重要文化財の指定を受けており、容易に見ることができない状態にある。^{注⑧}

第二節 田中塊堂『法隆寺一切経目録』への批判

『法隆寺一切経』の目録としては、田中塊堂氏のものだけが唯一の存在である。その目録は、昭和十七年から十九年の二ケ年にわたる法隆寺古文書整理の際の私記によってまとめられたものである。本稿を成すにあたって、『法隆寺一切経』の所在を確認する作業を行なった中で、一応の目安をつける手助けとはなったが、内容的にい

つかの問題点が存することもわかった。その問題点のいくつかを挙げると、左記の通りである。

① 目録としての整理が不十分のために、たとえば、目録内に示された所蔵者が、当該の經典のどの範囲のものを所蔵しているかが明確に示されていない。

② 目録内に誤字が多すぎる。たとえば、所蔵者名「山田文昭」を、すべて「山田文郁」と誤っているなどがそれである。こうした誤字が存すると、目録中に掲げられた經典名や奥書に対しても不安が残る。

このような初歩的な問題点が存することにより、この目録への信頼度が半減してしまう。そうした初歩的問題にとどまらず、私が独自に『法隆寺一切経』の所在を調査したところ、法隆寺以外に所蔵されているものとして、この目録に掲載されていないものを、大量に見つけ出すことができた(次節参照)。そのうちの最多の所蔵者は、大谷大学図書館である。目録には、わずか七巻しか存しないようになってはいるが、実際には、八十巻も所蔵されていたのである。また、目録に掲載されていない所蔵者としては、「谷村文庫(京大図書館)」「守屋孝蔵」「島田蕃根」等々がある。こうした点を考えると、この目録が、いかに粗雑なものであるかがわかる。よって、現在、法隆寺に所蔵されているものが調査できないので、とりあえず、私独自で調査した範囲のものを次節に掲げ、今後の研究の一助としたい。

第三節 法隆寺旧蔵一切経所蔵者について

本節で列挙していく法隆寺旧蔵一切経所蔵者は、昭和六十三年度に作成した卒業論文(本稿と同一)に掲載するために、昭和六十二年十月から十二月までの三ヶ月間調査を行なった結果、得られたものである。

《凡例》

一 掲載順は、まず、所蔵者をへゝで囲み、その後、經典名・書写年・書写者名を一項として列挙した。

二 通し番号を○で囲んだものは、田中塊堂『法隆寺一切経目録』に掲載されているものである。

三 以下に列挙する各經典は、左記の諸書によって所在を確認したものである。

- 暁鳥文庫仏教関係図書目録 金沢大学図書館編 昭和三六年三月
- 越後無為信寺不爭宝蔵目録 大谷大学図書館
- 真福寺善本目録(本・続) 黒板勝美編・刊 昭和十一年
- 真福寺善本集影 大阪府立図書館編 昭和十年
- 薬師寺経蔵目録 薬師寺編 昭和三六年
- 安田文庫古経清鑿(上中下三巻) 石田茂作編 昭和三七年
- 龍谷大学和漢書分類目録 龍谷大学図書館編 昭和十年
- 龍谷大学図書館貴重書目録 龍谷大学図書館編 昭和七年
- 龍谷大学図書館善本目録 龍谷大学図書館編 昭和七年

- 弘文莊善本目錄
 - 尊経閣文庫漢籍分類目錄
 - 住吉大社御文庫貴重図書目錄
 - 松尾大社社蔵文書目錄
 - 早稲田大学図書館和漢図書分類目錄(九冊のうち三冊)
 - 法隆寺宝物考證
 - 大谷大学図書館和漢書分類目錄(一〜三) 大谷大学図書館編
 - 古経題跋〈解題叢書〉 鵜飼徹定輯録 大正五年
 - 続古経題跋〈解題叢書〉 鵜飼徹定輯録 大正五年
 - 訳場列位〈解題叢書〉 鵜飼徹定輯録 大正五年
 - 古寫経綜鑿 田中塊堂著 昭和七年
 - 日本寫経綜鑿 田中塊堂著 三明社 昭和六年八月
 - 日本古寫経現存目錄 田中塊堂編 思文閣 昭和六年七月
 - 静嘉堂文庫国書分類目錄(二七〜四八四ページ) 静嘉堂文庫編 昭和七年
 - 華頂山古経目錄 知恩院編 大正十四年
 - 守屋コレクション宸翰古経目錄 京都国立博物館編 昭和五年
 - 守屋孝蔵蒐集古経図録 京都国立博物館編 昭和五年
 - 大蔵会展観目錄 文華堂書店
 - 昭和現存天台書籍綜合目錄 竹内理三編 東京堂出版 昭和五年
 - 平安遺文 題跋編 川瀨一馬編 臨川書店 昭和五年五月
 - 石井積翠軒文庫善本書目 川瀨一馬編 臨川書店 昭和五年五月
-
- 不空庵常住 古鈔舊契録 松田福一郎編 昭和六年一月
 - 重要文化財(18〜23) 毎日新聞社刊 昭和五年九月
-
- 〈大谷大学〉
- 古経帖
 - 古写経集
 - 古写経聚英帖
 - 1 開元釈教録 卷第十九 大治二年 林勝
 - 2 貞元新定釈教目錄 卷第一 大治三年 隆暹
 - 3 貞元新定釈教目錄 卷第七 大治四年 隆暹
 - 4 貞元新定釈教目錄 卷第十六 大治四年 隆暹
 - 5 貞元新定釈教目錄 卷第二十四 大治四年 林幸
 - 6 貞元新定釈教目錄 卷第二十九 永久二年 林幸
 - 7 貞元新定釈教目錄 卷第二十九 康和二年 静因
 - 8 貞元新定釈教目錄 卷第三十 永久三年 林幸
 - 9 貞元釈教録 殘欠 永久二年 林幸
 - 10 大周刊定衆経目錄 卷第七 永久二年 慈慶
 - 11 大周刊定衆経目錄 卷第十三 永久四年 慈慶
 - 12 大唐内典録 卷第九 永久五年 清曜
 - 13 阿育王伝 卷第九 大治二年 清曜
 - 14 弘明集 卷第八 大治二年 覚春
 - 15 長阿含経 卷第五 大治二年 覚春
 - 16 雜阿含経 卷第九 大治二年 覚春

- 17 別訳雑阿含經 卷第八 林智
- 18 四阿含抄解 卷上 永久二年 頼文
- 19 央掘魔羅經 卷第一
- 20 仏本行集經 卷第十 永久三年
- 21 仏本行集經 卷第四十八
- 22 摩訶般若波羅蜜經 卷第二十二 天治二年 明與
- 23 摩訶般若波羅蜜經 卷第三十二
- 24 光讚經 卷第四
- 25 勝天王般若波羅蜜經 卷第四 永久四年
- 26 仏説滯首菩薩無上清淨分衛經 卷上
- 27 大明度無極經 卷第四 天治元年 良祐
- 28 摩訶般若波羅蜜溫想拘舍羅道行經勸助品第四 卷第三
- 29 正法華經 卷第十九 實運
- 30 大方広仏華嚴經修慈分
- 31 大方広仏華嚴經 卷第十四
- 32 大寶積經 卷第十六
- 33 大寶積經 卷第四十七 永久三年 覚胤
- 34 大寶積經 卷第九十二 永久元年 頼助
- 35 大寶積經 卷第一百十一
- 36 護国菩薩所問經 卷上
- 37 仏説菩薩藏經 卷中
- 38 大般涅槃經 卷第三十
- 39 大方等大集月藏經 卷第九
- 40 寶女經 卷下
- 41 阿耨達龍王經 卷上
- 42 首楞嚴三昧經 卷中
- 43 大樹緊那羅王所問經 卷第一
- 44 仏説超日明三昧經 卷下
- 45 仏説等御諸法經
- 46 那先比丘經 卷下
- 47 仏説仏名經 卷第七
- 48 金光明經 卷第二 大治二年 覚春(注⑤)
- 49 蘇悉地羯羅經略疏 卷第三 永久三年 徳敵
- 50 大威徳陀羅尼經 卷第十五 応徳三年
- 51 大威徳陀羅尼經 卷第十九
- 52 大吉義神咒經 卷第四 保安四年 尊珍
- 53 根本説一切有部毘奈耶雜事 卷第十二 保安四年
- 54 根本説一切有部毘奈耶雜事 卷第十五 保安四年
- 55 根本説一切有部毘奈耶雜事 卷第二十八 保安四年 覚長
- 56 四分律 卷第五十四 良勝
- 57 大智度經論
- 58 十地經論 卷第四 天治二年 静因
- 59 十地經論 卷第十 長和元年 行教
- 60 毘婆沙善見律 卷第十一
- 61 阿毘達磨発知論 卷第一

- 62 阿毘曇八健度 卷第十五
- 63 阿毘達磨大毘婆沙論 卷第二十八
- 64 阿毘達磨大毘婆沙論 卷第五十二 元永元年
- 65 阿毘達磨大毘婆沙論 卷第七十二 久仁
- 66 阿毘達磨大毘婆沙論 卷第八十二
- 67 阿毘曇婆沙論 卷第四 嘉慶元年 良勝
- 68 阿毘曇婆沙論 卷第六
- 69 阿毘曇婆沙論 卷第二十 覺賀
- 70 阿毘曇婆沙論 卷第四十七
- 71 阿毘曇婆沙論 卷第六十三
- 72 阿毘曇婆沙論 卷第六十四
- 73 轉婆沙論 卷第一 慈慶
- 74 舍利弗阿毘曇論 卷第八
- 75 立世阿毘曇論 卷第十 應舜
- 76 般若燈論 卷第十 大治二年 天治二年 天治二年 天治二年 隆暹 行住
- 77 究竟一乘實性論 卷第一
- 78 瑜伽師地論 卷第三十 天治二年 天治二年 天治二年 天治二年 隆暹 行住
- 79 撰大乘論 卷上 天治二年 天治二年 天治二年 天治二年 隆暹 行住
- 80 十八空論 卷上 天治二年 天治二年 天治二年 天治二年 隆暹 行住
- ※大方広仏華嚴經 卷第四 永久三年 賴憲(注⑥)
- 〈浜田徳海〉
- ⑧① 統高僧伝 卷第七 尋玄
- ⑧② 統高僧伝 卷第二十一 林覚
- ⑧③ 統高僧伝 卷第二十八
- 〈知恩院〉
- 84 成唯識論述記 卷第四 延曆五年
- 85 成唯識論述記 卷第五 康平四年
- 86 長阿含十報法經 卷下 天平宝字六年
- 87 分別善惡所起經
- 88 大乘方広總持經
- 89 金剛般若波羅蜜經
- 90 大悲經 卷第一
- 91 大悲經 卷第二
- 〈大東急記念文庫〉
- 92 金剛頂瑜伽中略出念誦經 卷第一 永久三年 經暹
- 93 蘇悉地羯羅經略疏 卷第七 永久三年 覺印
- 94 大乘緣生論 大治二年 尋海
- 95 阿毘達磨品類足論 卷第十二 大治二年 尋海
- ⑨⑥ 仏説十一想思念如來經 保安四年 智嚴
- 97 三教治道論下卷 卷第二 保安四年 暹尊
- 98 歷代三寶記 卷第三 大治元年 暹尊
- 99 中阿含經 卷第五十九 天平宝字六年 靜因?
- 100 大乘広百論釈論 卷第十
- 101 五千五百仏名經 卷第七
- ⑨⑨ 破邪論 保安四年 覺印
- 〈安田文庫〉

103 弘明集 卷第一

104 掌中論

〈谷村文庫（京大図書館）〉

105 摩訶僧祇律 卷第十

〈尊經閣〉

106 弘明集 卷第二十八

〈東京国立博物館〉

107 申日兎本經

〈書陵部〉

108 貞元新定釈教目録 卷第十二

109 統高僧伝 卷第三

〈四天王寺〉

110 高僧伝 卷第一

111 高僧伝 卷第二

112 高僧伝 卷第三

113 高僧伝 卷第四

114 高僧伝 卷第五

115 高僧伝 卷第六

116 高僧伝 卷第八

117 高僧伝 卷第九

118 統高僧伝 卷第九

〈法金剛院〉

119 大小乘律論疏目録 卷上

120 大小乘律論疏目録 卷下

〈松本文三郎〉

121 十二門論

〈河野法雲〉

122 勝思惟梵天所問經 卷第二

〈守屋孝威〉

123 瑜伽師地論 卷第二十一

124 大方広仏華嚴經 卷第十五

125 仏説興起行經 卷上

126 註楞伽經 卷第一

〈伊豆修善寺〉

127 正法念処經 卷第四十一

〈天理図書館〉

128 大薩遮尼乾子所説經 卷第三

129 大方広仏華嚴經入法界品 卷第三十九

〈島田蕃根〉

130 阿毘達磨雜集論 卷第十

131 寶雨經 卷第四

132 優婆塞戒經 卷第四

133 優婆塞戒經 卷第五

〈唐招提寺〉

134 小乘律論疏目録

135 大乘律論疏記

大治四年 良能

天平神護三年

天

上

卷第一

永久三年

信耀

永久三年

勝賢

永久三年

卷第三十九

卷第十

卷第四

卷第四

卷第五

卷第二

卷第二十一

卷第十五

静因

静因

〈興福寺〉

136 高僧伝 卷第十三

〈妙法院門跡〉

137 廻諍論

〈国会図書館〉

138 大慈恩寺三藏法師伝 卷第三

〈京都浄福寺〉

139 僧伽吒経 卷第二

〈根津美術館〉

140 大乘掌珍論

141 鼻奈耶律序根本薩多部毘奈耶 卷第十

〈龍門文庫〉

142 禪要経

〈小川睦之助〉

143 金剛場陀羅尼経 卷第一

〈伊藤庄兵衛〉

144 三彌底部論 卷中

〈禿氏祐祥〉

145 諸経要集 卷第七

146 大周刊定衆経目録 卷第三

〈一柳知成〉

147 大寶積経 卷第四十七

〈村手重雄〉

智賢

覚印

148 仏説仏名経 卷第十二

149 仏説陀羅尼集経 卷第十二

〈生田龍成〉

150 説一切有部發智大毘婆沙論 卷第八十九

151 根本薩婆多部律撰 卷第十五

〈堀江清足(名古屋)〉

152 分別功德論

〈山田文昭〉

153 大寶積経 卷第一百十六

154 大寶積経 卷第一百十七

155 摩訶般若波羅蜜初品小品経 卷第一

156 十住経 卷第一

157 阿毘曇婆沙論 卷第五

〈住田智見〉

158 大周刊定衆経目録 卷第八

159 大周刊定衆経目録 卷第九

160 大周刊定衆経目録 卷第十

161 決定藏論心地品之二

162 阿毘達磨發智論 卷第十八

163 阿毘達磨大毘婆沙論 卷第三百三十二

〈神田喜一郎〉

164 大唐西域記 卷第二

〈反町茂雄(弘文社)〉

大治二年

保安四年

隆暹

慈慶

性意

覚印

勝賢

慈慶

165 仏説長者子六過出家經

保安四年

166 統高僧伝 卷第四

大治二年

静因

167 弁正論

保安四年

〈石井積翠文庫〉

168 古写経集(一切経断卷合)

第四節 書写者と書写年代

『法隆寺一切経』の書写に關つた僧については、すでに「一、天治本『新撰字鏡』と『法隆寺一切経』との關係について」で触れた通り、百十名もの名前が明らかになっている。その中でも天治年間前後、天永年間から天承年間までの二十九年間に活躍した書写者を、「一、天治本『新撰字鏡』と『法隆寺一切経』との關係について」の《三・書写者名》の《法隆寺一切経》の項に掲げたものを利用して、書写年代別に再整理してみると、左記の表②・③のようになる。

さらに、その表②・③から書写年代を、保安年間から大治年間までの十四年間に絞り、そこで活躍した書写者を摘記すると、以下の通りである。

○ あ行…胤願

○ か行…覚允・覚印・覚賀・覚嚴・覚春・覚長・観寂・経真・

経暹 慶深・嚴雅・嚴海・行住・行暹

○ さ行…慈慶・尺海・浄尊・静因・静快・静尋・尋心・尋海・

尋覚・尋玄・仁勝・正円・正春・清寂・清珍・清曜・

暹快・暹尊・宗信・尊珍

○ た行…智印・智嚴・智仁・長覚・定快・定観・定舜・道寂

○ な行…念寂

○ は行…範勝・弁海

○ ま行…明行・明興

○ ら行…頼慶・隆暹・良円・良勝・良能・良祐・林幸・林勝・

林智・琳範

では、次に、本稿が天治本との対校に用いる谷大本の奥書に見られる書写者を、右記の保安年間から大治年間までの十四年間に活躍した書写者を摘記したものをを用いて整理してみると、左記のようになる。

○ 静因(康和二〜大治二)

○ 覚長(保安四)

○ 尊珍(保安四)

○ 覚春(保安四〜大治二)

○ 隆暹(保安四〜大治四)

○ 林勝(保安四〜大治二)

○ 良祐(天治元〜大治二)

○ 行住(天治二)

○ 頼慶(天治二)

○ 明興(天治二)

○ 清曜(天治二)

大谷大学が八十巻という多数の『法隆寺一切経』を所蔵している

表③

天承		大治		天治		保安		元永		永久		天永		年代	僧名	
2		1		6		5		4		3		2		1		
															与勝	
															巖	
															円	
															春	
															寂	
															珍	
															曜	
															快	
															尊	
															信	
															珍	
															証	
															印	
															巖	
															仁	
															順	
															覚	
															順	
															快	
															観	
															舜	
															寂	
															寂	
															勝	
															海	
															行	
															興	
															清	
															慶	
															助	
															文	
															暹	
															円	
															勝	
															能	
															祐	
															幸	
															勝	
															智	
															範	
															範	

ことは、前の第三節で触れたが、保安年間から大治年間までというふうに書写年代を絞って活躍した書写者を見てみると、右に示した通り、わずか十一名と非常に少ないことがわかる。重要文化財に指定されている法隆寺所蔵のものを見ることができれば、より一層幅の広い天治本との対校が可能になると思うが、本稿では、右に示した書写者（天治本巻第一の書写に関わった静因、巻第八の書写に関わった隆暹の経典は除く）の経典を中心に、天治本との対校を行なうことにする。

四、天治本『新撰字鏡』と『法隆寺一切経』との比較・対校

第一節 作業の手順紹介

天治本との対校に用いた『法隆寺一切経』は、すべて谷大本であるが、これらの谷大本は、大谷大学の沙加戸弘先生、大谷大学図書館の方々の御好意により、大谷大学が所蔵しているすべての『法隆寺一切経』八十巻を調査させていただいた後、各経典の書写年、および、書写者が明確になっているものを中心に選び、それらのマイクロフィルムによる複写を依頼して得られたものである。今回、対校に用いた谷大本は、以下の通りである。

- | | | |
|---------------|------|----|
| 1 大寶積経 卷第一百十一 | 永久元年 | 頼助 |
| 2 立世阿毘曇論 卷第十 | 永久三年 | 応舜 |
| 3 大寶積経 卷第九十二 | 永久三年 | 覚胤 |

- | | | |
|----------------------------|------|----|
| 4 大周刊定衆経目錄 卷第十三 | 永久四年 | 久仁 |
| 5 阿毘達磨大毘婆沙論 卷第五十二 | 元永元年 | |
| 6 根本説一切有部毘奈耶雜事 卷第二十八 | 保安四年 | 覚長 |
| 7 根本説一切有部毘奈耶雜事 卷第十二 | 保安四年 | 尊珍 |
| 8 摩訶般若波羅蜜温想拘舍羅道行經勸助品第四 卷第三 | | |
| 9 瑜伽師地論 卷第三十 | 天治元年 | 良祐 |
| 10 摩訶般若波羅蜜經 卷第二十二 | 天治二年 | 行住 |
| 11 般若燈論 | 天治二年 | 明興 |
| 12 長阿含経 卷第五 | 天治二年 | 頼慶 |
| 13 阿育王伝 卷第九 | 天治二年 | 覚春 |
| 14 開元釈教録 卷第十九 | 天治二年 | 清曜 |
| 15 大周刊定衆経目錄 卷第七 | | 林勝 |
| 16 別訳雑阿含経 卷第八 | | 慈慶 |
| | | 林智 |
- 以上、対校に、右に列挙した十六の経典を用いたが、「三」、「法隆寺一切経」について）の第四節で列挙した谷大本の奥書に見られる書写者の経典の他に、書写年代が未詳であっても、天治年間あたりに活躍したかと思われる慈慶や林智の経典や、永久年間、および、元永年間といった保安年間以前の書写年代が記されている経典をも合わせて対校に用いた。
- まず、対校を行なうにあたって、書写者が不明な天治本五卷（巻第三・四・六・十一・十二）において頻出度の高いいくつかの文字（田中論文内で扱われていた「也」「第」「反」などの文字も含め

る)と同様の文字を、右に列挙した谷大本の各々の經典から切り取りし、天治本との対校が容易に行なわれる様、切り取った各々の文字をビニールシートに貼布した。

ところが、これら谷大本の各々の經典から得られた類出度の高い文字の資料を用いて、田中論文内で解明が不可能であった箇所を中心に、天治本との対校を行なってみたところ、類出度の高い文字の資料に関して、

① 天治本において多数見られた「也」をはじめとして、独立した文字の例が少ない。

② 独立した文字と、その文字自体が偏や傍の構成要素となつているものとを比較してみると、両者の字体がかなり違つてゐる。というような二つの不十分な点が見られたので、その点を補強する材料を得るために、天治本五巻内に各々収められている部首と同じ部首を持つ文字を、谷大本から抽出するというさらに細かな対校を行なつた。

右記の対校結果は、次節で紹介することにする。なお、天治本側の書写者(筆)の別は、田中論文の結果に従うことにし、本稿では、それを便宜上、表①の下段に設けた略号によつて表記する。(田中論文内で既に判明している書写者、林幸と覚蔵の箇所は、対校の対象にはせず、略号も設けないことにする。)

第二節 比較・対校の実際

本節では、書写者が不明な天治本五巻と、第一節において列挙し

表④

經典番号	対校結果	書写者(筆) 別に従つた	総合結果
3 a	×	頼助は天治本の書写に一切関わっていない	総合結果
4 a	×	応舜は天治本の書写に一切関わっていない	
6 a	×	覚胤は天治本の書写に一切関わっていない	
6 b	×	この經典の書写者は、天治本の書写に一切関わっていない	
11 a	×	久仁は天治本の書写に一切関わっていない	
11 b	×	覚長は天治本の書写に一切関わっていない	
11 c	×		
11 d	×		
11 e	×		
12 a	×		
12 b	×		
16	×	林曾は天治本の書写に一切関わっていない	
15	×		
14	×		
13	×		
12	×	清確は天治本の書写に一切関わっていない	
11	×	林勝は天治本の書写に一切関わっていない	
10	×	明興は天治本の書写に一切関わっていない	
9	×	類慶は天治本の書写に一切関わっていない	
8	△	行住は天治本の書写に一切関わっていない	
7	×		
6	×		
5	×		
4	×		
3	×		
2	×		
1	×		

天治本

大大大大

天治本

入入入入

谷大本

大大大大

谷大本

入入入入

〈類似点〉…すべて資料に付した○印のものを参照のこと

〈作〉〈作〉が見られる

〈大〉一画目と二画目の傾き・三画目の筆の入れ方

〈入〉二画目の筆の入れ方と払い

〈類似点〉

〈言〉一画の長さ(二画目が三画目に届いている)・二画目の

傾き・〈入〉の形

11c

天治本

言言言言言言言言

言言言言

注⑩ 3aの(詭)・(證)・(訶)・(謂)において類似が見られた(後

の資料を参照のこと)が、その3aで他の文字との対校を行なってみたところ、類似が全く見られなかったため、谷大本の書写者である良祐は、3aの書写には一切関わっていないこととする。従って、良祐は、天治本の書写に一切関わっていないことがわかる。

〈類似点〉

似 (詭)・(證)・(訶)・(謂)の四文字とも、偏と旁の字体が類

谷大本

言言言言言言言言

天治本

誦誦

天治本

證

天治本

訶

天治本

謂

谷大本

誦誦誦

谷大本

證證證

谷大本

訶訶訶

谷大本

謂謂謂

注⑩

11cの(大)において、一部、類似が見られた(下の資料を参照のこと)が、その中での類似数が少なかったこと、(大)以外の文字で行なった11cの対校の結果、類似が全く見られなかったことの二点から、谷大本の書写者である覚春は、11cの書写は一切関わっていないかかったことにする。従って、覚春は、天治本の書写に一切関わっていないことがわかる。

〈類似点〉：資料に付した○印のものを参照のこと

(大) 一画目と二画目の傾き・二画目と三画目の筆の動きが終る位置

天治本

大大大大大

谷大本

○大大大大大

結 論

今回、本稿を成すにあたって、『法隆寺一切経』の所在を検索する拠り所となったのは、田中塊堂氏の『法隆寺一切経目録』が唯一のものであった。ところが、調査を重ねていく中で、本稿〔三〕、『法隆寺一切経』について、述べたように、大谷大学図書館に八十巻もの『法隆寺一切経』が所蔵されていること、さらに、その他、かなりの数の蔵書目録（三、『法隆寺一切経』について 第三節の《凡例》三を参照のこと）を調査した結果、谷大本をも含めて、法隆寺以外に所蔵されている『法隆寺一切経』が、百六十八巻もあることがわかった。今、田中塊堂氏の目録を比較してみたところ、田中塊堂氏の目録には、かなりの遺漏があることが明確となった。当時の学問レベル、蔵書目録の出版事情等を考慮すれば、そうした遺漏もいたしかたないものであると思われるが、現在では、唯一の『法隆寺一切経』の目録である以上、その遺漏の多さは大きな問題であり、やがて、書き換えの必要性も起こりうるものと考えられる。従って、法隆寺には、昭和大修理の際に作成したと言われる目録が存するということから、私に調査して得られたものと、それらを総合すれば、田中塊堂氏の『法隆寺一切経目録』以上の目録が完成するに違いない。

二

今回、十六巻の谷大本に限定して、天治本との対校を行なった。しかし、その結果は、〔四〕、天治本『新撰字鏡』と『法隆寺一切経』との比較・対校〕の第二節で紹介したように、どの經典の書写者も、天治本の書写には関わっていなかったという非常に残念な形のものに終ってしまった。ただ、こうした結果は、今後のこの分野の研究に資するところは大きい。その意味で、この論文の意義は大きいと自負している。

その点、今後、大谷大学図書館以外で所蔵されている『法隆寺一切経』を数多く調査し、それらと対校すれば、書写者が判明することもあろうし、また、将来、法隆寺が所蔵している『法隆寺一切経』が公開されるようなことがあれば、今回の調査・考察以上に、様々な問題が解明できるであろう。

注

注① 田中塊堂氏は、承徳三年（一〇九九）の『大寶積経卷第七十四』を、『法隆寺一切経』の最古のものとし、書写過程の第一期をその承徳に定めている。しかし、大谷大学所蔵のものに長和元年（一〇二二）の『十地経論卷第十』が存することから、書写過程の第一期を、承徳よりも古い時期に設定するべきだと考えられる。なお、この『十地経論卷第十』が書写された長和元年よりもさらに古い時期に書写されたものも存在するという

ことが『法隆寺一切経』の所在を検索した際、明らかとなった(三)、『法隆寺一切経』について 第三節で列挙した経典、84・86・99・123番を参照のこと)が、これらの経典に関しては、後補された可能性が高いということで、本稿では、触れないことにする。

注② 上代、『古事記』には、エ・キ・ケ・コ・ソ・ト・ノ・ヒ・ヘ・ミ・メ・モ・ヨ・ロの十四音節に甲乙の区別があったとされる。しかし、年代が下るにつれ、『日本書紀』『万葉集』では、まず、「モ」の区別が失われ、さらに『万葉集』では、「ト・ロ」の区別も一部曖昧になってきた。また、奈良末期の『正倉院仮名文書』では、二層甲乙の区別が曖昧となり、中古初期になると、『新訳華嚴経音義私記』(七九四)・『日本霊異記』(八三三)に、唯一、「コ」の区別だけが残ったとされている。

注③ 奈良六大寺大観刊行会編 『奈良六大寺大観第四卷』(六十九ページ)。

注④ 詳しくは、左記の各書を参照のこと。

- 一 石田茂作編 『秘宝第一巻 法隆寺上』
- 二 奈良六大寺大観刊行会編 『奈良六大寺大観第四卷』
- 三 田中塊堂著 『日本寫経綜覽』

注⑤ この経典の旧所蔵者は、田中塊堂氏の『法隆寺一切経目録』では、住田智見氏となっているが、実際、私見によると、巻首に山田文昭氏の所蔵印が見られることから、山田文昭氏であったと考えられる。

注⑥ 『平安遺文 題跋編』による。但し、私見によると、大谷大學には所蔵されていない。

参考文献

- 京都大学文学部国語学国文学研究室編 『新撰字鏡増訂版』 臨川書店 昭和五十四年四月
- 国語学会編 『国語学大辞典』 東京堂出版 昭和五十七年五月
- 中田祝夫・和田利政・北原保雄編 『古語大辞典』 小学館 昭和六十年一月
- 佐藤喜代治編 『国語学研究事典』 明治書院 昭和五十二年十一月
- 『岩波講座日本語9 語彙と意味』 岩波書店 昭和五十三年一月
- 阪倉篤義編 『講座国語史3 語彙史』 大修館書店
- 石田茂作編 『秘宝第一巻 法隆寺上』 講談社 昭和四十五年三月
- 奈良六大寺大観刊行会編 『奈良六大寺大観第四卷』 岩波書店 昭和四十六年五月